

この学院の卒業生の多くはシベリア抑留の難にあつたが、吉兼氏は通訳として任に当たつた。一方吉兼氏ら在校生は校舎から追い出され途方にくれたが、侵攻してきたソ連軍との折衝、在留邦人避難民の保護援助に当たつた。また引揚げには婦女子の援護業務に当たつた。

引揚げ後、改めて各大学に進学した者もいるが、ハルビンでのわずか一年数カ月の生活ではあつたが、当時のきずなは五十年経た今日、なお太く交流を続けつつ古稀を迎えんとしている。

(岐阜県引揚者団体連合会)

理事長 川村 一正

## わだち

東京都 太田 古雄

### (一) いざ満州へ

大正十年山梨県の片田舎で生まれた私は、五歳のと

き父を失い、七歳違いの姉と二人は母の手一つで育てられたが、十六歳のときその母もこの世を去つた。そのため学業も中断するという逆境の中にあつて、人生の指針を探し求めていたとき、たまたま満鉄社員の募集があり、幸いにも採用されることになった。

そのころは、満蒙開拓の重要性が声高に叫ばれて、青少年の夢をかき立てていた。それにこたえた多数の青少年が、大陸の新天地に夢と希望を託し、陸続として渡満する時代だった。

昭和十二年八月神戸港を後に故国に別れを告げて、大陸の表玄関満州国大連に上陸したのは十七歳の夏であつた。そこで「ハルビン鉄路局三棵樹<sup>さんかじ</sup>駅勤務を命ず、日給一円四十銭を給す」の辞命をもらった。

国際都市ハルビンは異国情緒に満ち溢れた大都會で、山梨の山村から出てきた私にとっては、驚きと興味の尽きない素晴らしい街であつた。

### (二) ハルビン生活が始まる

ハルビン駅から駅二つ離れた三棵樹駅の駅員となつた私は、非番の日はよく友人と共に、ハルビンの街を

物珍しく歩き回った。丸商とか登喜和という地段街にあるデパートに働く目の青い金髪の美しいロシア娘に魅了され、話が自由にできたらさぞ楽しいだろうと思つたのが、ロシア語を習おうとした動機である。ロシア語が自由に話せたら、美しい娘たちをスنگアリー（松花江）の船遊びにも誘うことができると、ほのかな想像のロマンが日ごとに昂じていった。

駅の朝礼後にも二十分ばかりの簡単なロシア語の講習があった。必要な単語は片仮名で手帳に書いて、暗記したりした。本格的に習い始めたのは、ハルビン鉄道学院のロシア語専修科へ入学してからである。学習期間中はハルビン市内にあるロシア人部落の、ある家に下宿した。家主はアンナおばさんで、その娘のニーナとピタリソフ爺さんが住んでいた。

鉄道学院には豊富な教師陣が待ち構えていた。文法・会話は専らロシア人教師が担当し、日本語は一切使わない。さっぱり分からなかった言葉が、日が経つにつれて理解できるようになった。そのほかに日本人教師は露文和訳・和文露訳などで、教材は教本と新聞記事

を中心としたり、そのほかシベリア経済事情や鉄道用語などの多岐にわたる講義があった。学習が終わると下宿へ直行し、ピタリソフ爺さんや、ニーナを捉らえては会話の復習をした。朝から晩まで正にロシア語漬けの生活は、六カ月後の卒業のときは、見違えるほどの流暢な会話ができるようになって、三棵樹に戻り朝礼後の語学講師の兼務を仰せつかった。

(三) 笈<sup>せき</sup>を背負って新京へ

昭和十六年十二月多数の同僚が現役兵として、軍歌と万歳の声に送られ、三棵樹を発っていった。私は第二補充で兵役を免れたのを機会に、ロシア語習熟のために最高学府のハルビン学院を目指した。入学資格を取得するために新京商業夜間部で学ぶべく、慰留する駅長に三拜九拝して新京駅へ転動させてもらった。

「人生急がば回れ」である。

昭和十七年四月から二十年三月、蛍雪の功を積んで卒業したうえ、満鉄の派遣給費学生として、憧れのハルビン学院の門をくぐった。すでに第二の故郷となつたハルビンへ錦を飾つたのである。

#### (四) 憧れのハルビン学院

昭和二十年四月、夢と希望に胸膨らませて、伝統ある憧れの国立大学ハルビン学院生となった。学窓から直行したのであろう同期生は皆若く、社会人として過ごした数年の空白がいささか老人臭く、気後れを意識した。

午前中は授業、午後はグライダー班員として、だだっ広い軍用飛行場の片隅で、滑空訓練に汗を流した。宿舎の寮で担当させられた仕事は、ロシア人農家から毎朝運んでくる牛乳の寮生に対する配給係。腹の空いた昼飯時に、地下室に降りて行ってだれもないのをいいことに、容器に黄色く浮いている乳脂をコップですくい、味見する役得があった。夜は抜き打ちのストームに駆り出されて、赤々と燃える焚き火を囲んだ陣中で、バケツや洗面器を打ち鳴らして踊り狂い、放歌高吟。「夜間の無届けの焚き火はまかりならぬ」と、南崗警察から大目玉を頂戴したことなど、短期間の学院生活ではあったが、結構記憶に残る楽しい思い出が、断片的にあたかも昨日のことに鮮やかによみが

えってくる。

若い同窓生と違い、第二補充兵籍にある私は、「いつかはくる？赤紙」が頭の隅から消え去ることはなかったのだが、昭和二十年七月某日、恐れていた赤紙の召集令状が、学院の事務室を経て届けられた。「七月二十二日南崗警察に出頭せよ」とのこと。

#### (五) 一ツ星の兵隊になる

当日、南崗警察に集合する。集まってきた人たちは四十歳前後の社会人が圧倒的に多く見受けられ、兵員対象年齢の老化が戦局の緊迫を物語っていた。

ハルビン駅を発車した軍用列車は一路西へ、チチハル駅から北へ向かい、国境に近い北滿嫩江のんとうの二六八―五部隊に入隊した。この部隊は混成旅団で、ハルビンを中心に召集された者たちらしく、精銳部隊には隔たりのある集団であった。軍装一式が支給され、どうやら兵隊らしい格好が整った。訓練は専ら爆薬を抱えて戦車に突入することの繰り返しと、国境線に沿って戦車壕を掘る作業が続いた。

八月十四日、珍しく晴れた嫩江上空を南下する双発

のソ連機らしき機影を望見する。何となく部隊が慌ただしい、と思っていると、「部隊はこれよりハルビンへ向かう」との命令があり、二十日ばかりの嫩江の部隊生活に終止符を打って、あらかじめ用意されていた軍用列車で一路南下した。沿線には開拓団の働き手を軍隊に徴用されたのであろうか、不安気な面持ちで見送る老・幼・婦女子の留守家族の姿が印象的であった。チチハル駅に停車中、大切な米穀通帳がホームに散乱する様を見て、異常事態の発生を予感する。

ようやくハルビン駅に到着したのは、嫩江を発ってから三日後の八月十六日であった。広い構内の数十条の側線は、貨物列車の車両で埋め尽くされ、紐を張り渡した無蓋車の上には、無数の洗濯物が風にはためき、線路をまたいで往き来する婦女子の声が、ひととき喧噪を極めていた。これはただ事ではない。列車から降りて駅舎を一巡する。理性を失った人々の動きが慌ただしく、まさに混乱の極みに達していた。偶然、顔見知りの満鉄病院の看護婦から「日本は負けたのよ」と教えられた。ハルビンまでの沿線の途次で見た事態で、

あらかじめの予感があったものの、この情報は正に愕然とする大きな衝撃であった。

私はこれからいかにすべきか。強烈な脱力感が正常な思考を妨げる。ハルビン馬家溝の学院や学生たちは今ごろどうしているのだろうか？ 思いは走馬灯のように次々と変転する。

確たる判断もつかぬうちに、大隊に編成替えされた部隊に従って、ハルビン西方六十キロの濱洲線警東駅ちんしゅうと関東軍倉庫の警備に就く。一夜明けた十七日、大隊長からソ連の参戦と日本の全面降伏が告げられた。

「程なくソ連軍が当駅に到着する。その際、武装解除が行われる予定である。銃や帯剣を磨き、帝国軍人として恥ずかしくない対応をしなければならない」との訓示があった。続いて別途、隊長から呼ばれた私は、「武装解除の通訳はお前がやれ。お前はハルビン学院生だろう」と命令されたものの、初めての重任に胸の鼓動が高鳴る。隊長は続けて、「お前の星一ツの襟章では、帝国陸軍の格が落ちる。少尉の襟章に取り替える」こうして終戦のにわか将校が誕生した。

やがて到着した列車からは、接収の任にあたるソ連の將校と兵隊がやってきた。整然と並べられた武器と、引き継ぎの調書を持って整列する日本側の兵隊に一瞥を与えただけで、「拳銃と軍刀を出せ。隠しだてしたら射殺する」代表者たる隊長に目もくれず、直接、通訳に話しかけるなど、接収隊長と通訳の対話に終了したのである。滅茶苦茶な武装解除は平和裡に行われた。武器はついてきた兵隊が、一把握りからげにして軍用列車にはおり込んだ。軍人の魂と言われていた武器が、いとも簡単に扱われる姿にいいような腹立たしさと、懐旧の情が交錯した。武器を捨てて丸腰となった我々は、近くの空倉庫に拘束されたのである。この一部始終を傍見していたのは、この地区の鉄道施設に集結している避難民たちであった。倉庫は薄暗く、目標を失ってこれからの展望に思いを馳せると、ますます気が滅入り、不安が募るばかりだった。

「通訳こい」とソ連兵に呼び出され、ついで行くと、日本人難民の居住する宿舎だった。訳の分からない展開に訝かっていると、代表らしき恰幅のある人が建物

から出てきて、「今の兵隊は満州国県公署で、警備係に雇っていた白系ロシア人の部下だったので、特に頼んで通訳さんに来ていただいたのです。この駅を軍用列車が頻繁に通過します。時に、長時間停車すると、ここの社宅群にやってきましたが、言葉が分からず、すでに数件、誤解が原因の暴力沙汰が起きて、困っているところでした」と、このような訳で、私はこの難民部落の対ソ渉外係として、同胞の安全を守る一員に加えられたのです。

#### (六) 難民部落の生活

「運命は人間をもてあそぶ」ロシアの諺のように、シベリア送りを免れた私は、学生から二等兵、それから少尉、そして今また民間人へとわずかの間に目まぐるしい変身をしたのです。ここの集団の正式名称を「肇東日僑居留民会」と称し、会長は元肇東県次長の小野さんと言い、大分県の出身だとのことである。避難民とは言うものの、大部分は既往の満鉄社宅に城内居住の日系職員が合流し、その上に沿線開拓団から避難してきた難民婦女子を収容した集団であった。食

糧と衣料は接収間に日本軍から放出を受けていたので、切迫した衣食住の問題はなかった。

通訳の仕事は大多忙、昼となく夜となく相次いで、無法な訪問者がやってきた。日中は穩健な対応で済ますことができたが、夜の兵隊は、暗闇が大胆にさせるのか、粗暴な振る舞いが多く、銃口を前にして要求をすり替える問答には、正に忍耐の連続と命の縮むような修羅場であった。特に「女を出せ」には困った。この場合は金銭にすり替えたり、成功したときは通訳冥利に自己満足することもあるが、行き詰まったときに玄人女性の儀性的申し出によって心ならずも彼らの要求に屈し、危機回避をしたこともあった。

邦人の保護を第一主義にと走り回っているうちに、大きな人的被害もなく、数カ月が過ぎて、朝夕の寒さは一段と厳しさが加わってきた。東支鉄道建設の際、ソ連人によって植えられたであろう榆の巨木の梢には、毎朝のように美しい樹氷が咲いた。自然の造化が織り成す真っ白な花は、北国でしか見ることのできない短命な花である。太陽が顔を出し、気温が上昇すると、

いつともなく消えてしまうからである。

何をすることも無い居留民は、白壁のロシア建物に射す日溜りに集まって、雑談に時を過ごしていた。そこへソ連将校がやってきて「厩舎の作業を手伝ってもらいたい」と言う。会長を交えて居留民会の主だった人と相談の結果、「断わる訳にはいくまい」ということで、保安要員を残して四十人の供出を決めた。

翌日朝からもちろん、私を含めて迎えにきた馬車に分乗して厩舎に向かった。入口には「国立種馬場」と昔ながらの看板が掲げてあった。作業は整然と数棟が立ち並ぶ厩舎に繋がれた馬に、糧秣を与えたり敷藁を入れ換える単純作業であるが、未経験者の集団であるから、恐怖心が絶えず付きまどった。昼食をソ連軍野戦食で済ませたとき、「通訳」と呼び出され、驚くような次の命令があった。「これより馬を松花江畔に繋留してある船舶まで陸送することになった。各人五頭ずつを受け持ち、合計二百頭を連れて行くのだ。松花江までは三十キロあるから、今からでは夜になるが、徹夜で歩いて運ぶのだ。これは軍命令である」否も応

もない。啞然とする協力者たちに説明する弱腰の通訳もつらかった。馬の扱いに馴れたソ連兵に、手際よく鞍掛けしてもらった。これは長距離のため、疲れたら乗馬できるようにするためであった。

準備もでき、どうやら出発することとなったが、満馬より背の高い見上げるような日本馬である。刈り取りの済んだ果てしなく広がる高粱畑の道を、「ダワイ、ダワイ」の声を聞きながら、黙々と進む。夜のときばりの訪れに疲れと眠気も手伝い、馬に対する恐怖心も安らいで、人手を借りて馬上の人となるも、落馬するは、繋がれたはずの馬が放馬するは、寒さの中を悪戦苦闘の結果、一人の落伍者もなく。

翌朝、松花江畔にようやく到着し、馬の乗船作業も無事終了した。「我々は無償で、かつ一睡もせず馬の陸送に協力した。鉄道駅まで馬車の提供をお願いする」と要求した。少しは我々の協力を認めたのか、近傍から十台ほどの馬車を集めてきて「乗れ」と言う。地獄に仏とばかり馬車に分乗し、最寄りの駅を目指すところがソ連軍が遠ざかり見えなくなると、「馬車を

降りろ」と中国人馭者が言う。いろいろ聞いてみると彼らもまた被害者で、強制的に無償で徴発されたことが分かった。仕方なく飢えと寒さに疲れただ体で駅まで辿り着き、軍用列車に潜り込んで夕刻に帰り着いた。留守家族は帰ってこない男たちの安否を気遣って大騒ぎの夜を明かしていたのである。

#### (七) いざハルビンへ

十二月も中旬になると、寒さもひとしお加わり、防寒衣のない私は、城内へ出掛けて行って、線入れの黒い中国服を調達した。今まで格好悪いと、見向きもしなかったけれど、実際に着てみると暖かく、保温力抜群で、なお好都合なのは、日本人という外見からの脱皮だ。ソ連人から見れば民族の違いは、服装で判断しているようだ。

このころになると、戦後の興奮と混乱も鎮静化に向かっている。夜ごと訪れる無法な訪問者の頻度も減少しつつあった。が、時折、八路兵の訪問も見受けられ、八路軍の進出をめぐって、中ソ間における何らかの権力地盤の協定ができたのではないかと思われた。

終戦直後に南へ向かう軍用列車は、すべて兵隊が満載されていたが、最近では空車ばかりが通過していく。反対に満州里方面へ向かう列車には、日本軍人の捕虜列車が頻繁に通過したが、今では戦わずして敗れた満州国に蓄積された膨大な物資や、解体された産業機械の梱包などが、うず高く積載されて途絶えることなく、陸続と運ばれていく。来たるべき厳冬には貯蔵物資の裏付けもあって流入した難民も含め、居心地が良いのかすっかり居留民村に定着しているし、越冬という大きな目標の前に問題点はなかった。束の間の平和と単調な生活が『時』に対する関心を失わせていた。

ある日のこと、珍しくソ連将校が二人この部落にやってきて、「今日から七日後に三百人の兵隊が到着する。目的は日本軍の施設や倉庫にある物資の搬出作業である。宿舎は君たちの居住する建物を使用することになったから、七日以内に明け渡さなければならない。これは軍命令である。」

居留民班長たちの協議は甲論乙駁<sup>こうろんおつぱく</sup>、なかなか結論に達しなかった。と言うのは、ハルビン日本人会からの

伝言に、「東満や北満からの難民で満ち溢れ、収容力に余裕なし、可能な限り現地で越冬されたい」との指令があったのである。「通訳さん、えらいことになったね。駄目かもしれないが、千二百人からの集団の中には女子供が多い、事情をよく説明して、何とか他の施設に振り替えるよう頼んでくれませんか」会長の要望によって、引き受けたものの、私には自信がなかったが、極力実情を訴えて、変更してくれるソ連軍に懇願した。「いろいろ検討したが、これに代わる建物はほかにはない。これは軍命令であるから変更はできない」と突っぱねられた。正に『万事休す』だった。

この旨会長に報告するや、「ハルビンへ引き揚げざるを得まい」と、決意の臍<sup>はら</sup>を決められたようだ。会長の裁決によって、日本人会指令に叛<sup>むか</sup>いて、ハルビンへ引き揚げる方針が決定したのである。しかも今日から七日以内に。

居留民村は急に慌ただしくなった。が、一番大きな難問は、この大多数の集団をいかにして、無事故かつ円滑に輸送するべきか、という点で、手段はただ一つ



「鉄道」でしかない。しかも鉄道はソ連側によって運営され、旅客営業の輸送は行われていない現況においておやである。

警東駅には中尉の駅長と五、六人の兵士が駅務と警備を兼ねて駐屯していた。私はこの穩健な職員たちと既に顔見知りであり、暇なときには、ソ連人の駅務員たちにアルコールを差し入れ、駄弁で時を過ごす仲だったので非常に好都合であった。

今日も白酒の瓶をぶら下げて駅長室にチューコフ中尉を訪ねた。満鉄時代からの壁掛け時計の振り子が、激動する社会を知らぬ氣に、ゆっくりと時を刻んでいる。朝な夕なに斉唱したであろう満鉄社訓が額縁に入れられて飾ってある。すべてが昔のままで、数カ月前の敗戦の混乱を忘れさせた。仕事の区切りのついたチューコフ中尉に、昨日の立ち退き軍命令の経緯を説明し、そのため軍用貨車に便乗可能や否やを打診した。「それは無理だよ」と否定されたが、あいまいな感じを受けた。帰って会長に報告の際、「資金を出してくれるなら、成功の可能性有りと判断します」と言い足した。

「結構です。要るだけ出しましょう。千二百人を無事ハルビンまで運んでもらうのですから」と快諾を受けた。

次の日も、また次の日も駅長詣でが続き、根負けした駅長からついに「明朝早く発つ有蓋貨車の多い列車に乗せよう。時間は六時とする。停車時間は特に七分とする」正に具体的な好意溢れる了承を得て雀躍した。明朝六時前に駅ホームに集合すること。婦女子は有蓋貨車に乗り、屈強な男子数人が同乗する。その他の男子はすべて無蓋車に乗る。携帯食は可能な限り準備する。入念な防寒衣服を着用する。班編成を百人単位で十二班として、班長が確実に掌握することなどが決められた。

翌朝は夜の闇が明け切れず、身を切られるような寒さであった。定刻より少し遅れて列車が到着した。待ち兼ねた居留民たちが、手はずに従い、手際良く時間内に乗車を完了した。駅舎の前で確認をする私と、チューコフ駅長が立ち会って、これを見届けてから駅長に感謝の言葉と、固い握手を交わし、用意した礼金を渡し

て車上の人となる。

列車は汽笛を鳴らし、黒煙を吐きながら動輪の力を次々と連結器に伝えながら動き出した。しかし軍用列車はダイヤ通りに走らず、次の駅でも、また次の駅でも数時間の停車もあれば、数分の停車で動き出すこともある。長時間の停車時がもっとも危険で、農民が鎌などで武装して襲撃してくるし、それにソ連兵もやってくる。いずれの場合も共通していることは、日本人難民たちからの金品略奪が目的であった。そのたびに事故現場へ駆けつけては、長い列車を往復した。銃口の前にさらされた命を永らえて、千人を超える邦人の集団を目的地まで輸送し終えねばならないという使命感が、心の支えとなっていた。ハルビン駅構内での警備兵との紛争は極力避けなければならない。そのためには大胆な手段だがただ一つある。この列車を駅構内手前の場内信号機のところで停車させ、全員を降ろすことだ。私は班長に招集をかけ、この計画を伝達した。早朝に出発した列車が、松花江を挟んでハルビンの街を望む対岸の廟台子駅にたどり着いたときは、既に

夜の闇に包まれていた。鉄橋を渡り終え、次はハルビン駅である。駅の手前で臨時停車ができるかどうか、運を天に任せるしかない。かねて私は難民の一人から、通訳なら身体検査も受けまいと、始末に困った拳銃を預かって満服の懐深く隠し持っていた。

成功に導くためには、機関車に乗りこんで機関手と交渉する方法しかない。やがて列車が動き出した。列車がスピードを上げてしまうまでは発見されないように、機関車のステップに足をかけ、手摺りにしがみついていた。鋭い刃物で斬られるような冷たい風が、次第に強く頬を刺しては走り去って行く。氷のような鉄の冷たさが手袋を通して、次第に指の感覚を奪っていく。機関車はますます速度を上げる。電柱が体の横をめまぐるしく、次々と走り去る。車輪の音が轟音に変わり、松花江鉄橋を渡り始めた。橋脚の下には、川の上に降りたまった雪が夜目にも白く見える。列車は鉄橋を渡り終わったようである。

頃や良しと、機関車によじ登る。右手に拳銃、左手に脂汗で粘ったくなった札束を握り、「おい、信号機

の前で列車を止める。言うことを聞いたなら、このとおり金をやる」と、言うや否や外へ向かって一発の威嚇射撃をした。この場の空気を察した機関士は制動弁を引いた。停車したところは、片側が一面街という日本人経営の飲食店街が多く建ち並ぶ。都合の良い地点で停車した列車からは、班員の誘導で皆一斉に下車をし、投げ降ろした荷物は土手の傾斜を一面街に転がり落ちていった。降車終了の伝令を受けるや、機関手に向かつて札束を放り投げた私は、機関車から飛び降りた。機関車の上から「スバシーボ（ありがとう）」と、意に反したお礼の言葉が降ってきた。

張り詰めていた緊張が緩んで、忘れていた笑いと涙が止めどなく溢れ出てきた。どこまでも続く二本の白い鉄塔がわだちのように、闇の中に溶けこんでいた。邦人の大量輸送を無事故で済ませた結果を、ハルビン日本人会に行つて報告し、過分のお褒めとねぎらいの言葉をいただいた。

#### (八) 南満へ

ハルビン日本人会では、知り人の満鉄社員に

会った。これから奉天まで行くとのこと。ハルビン市内の病院では、増え続ける難民の治療で医薬品が不足しており、情報によると奉天の街では、豊富な医薬品が格安で入手できると言う。誘われるまま夜行の軍用列車に潜り込み、無蓋貨車の片隅で厳寒に震えながら一夜を明かし、翌日奉天に着く。

奉天の街に溢れる人の波を押し分けて、薬品の知識もないのに、「劇」、「麻」の名のつく薬品類を買い求めて、麻袋に詰め込み、ハルビン目指して駅に向かう途中、ソ連兵の日本人狩りに遭ってしまった。目的は兵隊の移動した空き家の清掃作業であった。通行中を拘束されて、集められた日中両国の混成メンバー二十数人の通訳を兼ねて作業する。どうやら病室の跡らしく空きベッドの間に、乱雑に脱ぎ捨てられた分厚い新しい毛糸の靴下が散乱していた。これを捨てるのはもったいないとばかり、可能な限り腰紐に挟み込んだ。さて作業は滞りなく終わり、作業労賃として要求した幾ばくかの缶詰を分配した後、夜行列車を選んで潜り込み、翌朝、新京の駅で途中下車する。

新京駅前には戦前の姿そのままの静けさがあった。変わったことと言えば、銃を肩に掛けたソ連兵の立哨する姿が敗戦を意識させる。

安否やいかにと駆けつけた親類の家族は全員無事で、また私が無事であったことも喜んでくれた。住居は満鉄住宅で、避難する事態も起きなかつたので、家財の散逸もなく、家の中の空気ははまだ北滿各地で起きている過酷な敗戦の混乱も、さながら夢のように平和であった。引き止められるままに、その夜は垢にまみれた体を洗い流し、柔らかな布団に体を横たえて安眠することができた。ただ一つ気になったのは、入浴時に発見した数匹のしらみで、拾った靴下に寄生していたものらしい。奉天で清掃した空き家が流行性疾患の隔離病舎ではなかったかということである。

翌朝目覚めたが、体がだるく、熱っぽい。そのまま床に臥つたが、これが発疹チフスとの闘いの前奏曲であった。まるで新京への立ち寄りには、病氣治療のためだったようで、その意味では強運であったともいえる。連日四〇度前後の高熱が続き、家族の手配で満鉄病院

医師の往診やら、家族の手厚い看護を受けて、一カ月余りの闘病生活の後、回復したのは、昭和二十一年の早春だった。

親類の家は子沢山で、ポツポツ噂の出始めた日本内地への引揚げ話が聞かれるようになっていたこともあって、引揚げ道中の有力な助っ人と位置づけていたようだ。学校や学友の安否を確かめるために、ハルビンへ帰りたい、と願う気持ちを押しとどめたものは、発疹チフスで、お世話になった大恩に背くことが、できなかったからである。

病氣が癒えて徒食するのも心苦しく、繁華街の吉野町入口だった社宅前の空き家に小屋掛けして、売り食いする日本人の委託品販売を始めた。衣類や家具、絵画などを売却しては手数料をいただいた。街の治安は国民政府軍によって維持されていたが、八路軍との激しい市街戦の後敗退した。数日後には米軍武装をした国民政府軍の北上により八路軍が撤退し、再び平穩を取り戻した。

こうして露天商の呼吸をのみ込み始めたころ、九月

下旬、旧新京市内の居住者が何班かに分けられて、大人も子供もリュックサック一個という制限を受けながら、大家族の荷物運搬人となって、壺蘆島<sup>こもろ</sup>經由<sup>よち</sup>で懐かしい故国の土を踏んだのは、十月上旬であった。

戦後五十年の歴史を闊したが、今でも「あのとき不義理をしてもハルビンへ帰っていたら、未知なる人生の展開があったのではなからうか」と思うと、残念な気もするのである。

#### (ウ) 日本へ引き揚げてから

昭和二十一年十月十一日、引揚船「高砂丸」から長崎県諫早に上陸、姉を頼って東京へ向かう。姉の家は六人家族の大世帯、しかも子供は幼く、食糧を確保するためには、徒食する暇もなく、混雑する買い出し列車に乗って、米、芋、野菜などをリュックサックに詰め込んで、毎日精出した。またその間にも職捜しをしなければならなかった。外務省ロシア課にも出向いてお会いしたのが、ハルビン学院卒業の松原先輩であった。「仕事ならあるよ」と、その場で課長のところへ連れていかれた。突然、ロシア語の質問があり、ロシ

ア語でお答えしたのが「合格」したのであろうか、即日「船舶運営会勤務を命ず、臨時主計士（尉官待遇、給千円）」の辞令をいただいた。シベリアからの抑留軍人を、ナホトカから敦賀まで運ぶ船に乗り組んでの通訳業務である。

その間に私の縁談が進められていた。父のまた従姉に当たる妻の父が、一人娘を嫁にもらって欲しいと、姉のところを話しを持ち込んできたのだ。子沢山の姉の家が食糧確保に苦勞する姿を見るに忍びず、この縁談を進めてもらう承諾をして、昭和二十二年三月結婚する。早くして父母に死別している私は、妻の父母をわが実父母の再来と、位置づけて幸せな心の安らぎのなかに、どっぷりと漬かる生活が始まった。

自宅待機となっていた私に、敦賀に停泊している遠州丸から出港通知の電報を受け取った。だが、愛すべき義父は絶対反対で、義父の勤める電力会社への就職を斡旋してくれた。そのため、残念ながら遠州丸へ断りの電報を打った。今にして思えば、いまだにロシア語への愛着を持つ私が、ロシアに逃亡したらかわい

娘が不幸になると、判断したのかもしれない。

就職した会社は日本発送電(株)といって、戦時電力を統制するために生まれた、国策会社である。その後、集中排除法の適用企業となり、その精算事務に従事中、たまたま電力不足の解消を目的とした「電源開発促進法」の制定を見、それに伴い、「電源開発(株)」の設立と共に昭和二十八年一月入社した。総裁は元「満州重工業」の高崎達之助氏で、その方針は「少数精鋭主義」をモットーとした。設立早々であるために何もかも未整備、責任も大きい、実績が目に見えてくるため、若い情熱を惜しみなく燃焼させて働き甲斐があった。かくして四十年余、現役を引退、二人の娘のうち、末娘夫婦と男女二人の孫との六人、三世代が一件の家に住んで、私なりに自適の毎日を妻と共に暮らしている、年金生活者の一人である。

### 【執筆者の横顔】

蝶蝶が一匹韃靼海峡を渡って行った。幼時期に父母と死別。姉一人を故郷に残して大連行きの船中で、少

壮の氏の心に去来するものは、孤独と希望が相半ばし、安西冬衛の名句にあるこの蝶のような心境であったろう。

少年社員として勤務した駅は、ハルビンに近く、氏はそんな居住環境からソ連への関心と興味が大きく育まれた。

地道に研鑽の実績を重ね、数多くの辛酸の末、満鉄給費派遣学生として、当時ロシア語・ソ連事情では最高学府であった「国立大学哈爾濱学院」入学まで登りつめる。誠に刻苦勉勵の士である。

しかし、学業半ばにして現地召集と終戦。筆舌に絶する苦難の中、身についたロシア語を駆使し、後藤新平伯の遺した学院自治三訣(人のお世話にならぬよう、人のお世話はするよう、そしてむくいをもとめぬよう)を信条に、大量の難民救済に身を賭したのである。

引揚げ後は、直ちにシベリア復員船の通訳となり、同様の奉仕活動を続けた。が、結婚後、義父の薦めで、電源開発の会社に就職。高度経済成長期のダム建設で、愛妻と共に、日本国中の山間僻地を転々とする。世事

からも離れ、学院同窓会の存在を知り、出席したのは戦後四十三年を経た、昭和六十三年であった。『おお、生きていたのか』と同期生に今浦島のように懐かしがられた。太田氏も七十六歳。二人のまな娘も嫁ぎ、愛妻と共に悠々自適の年金生活。趣味のロシア語もますます研究を重ね、円満高潔な人格はだから愛されている。

(岐阜県引揚者団体連合会)

理事長 川村 一正

## 中国残留八年の回想

東京都 都丸泰延

(一) 昭和二十年三月北滿ハルビンへ旅立つ

昭和十五年四月「質実剛健」の校風をもつ都心の中学へ入学した。五年間は戦時下の教育を受け、平凡な軍国少年の意識が涵養された。体格は、身長が百五センチメートルから百七十センチメートルに成長し、

体重が三十九キログラムから五十六キログラムに増加して並であった。運動は、長距離走や強歩行軍などの持久力に強く剣道は初段だった。学科は英・数・国・漢が重要視された。英語は大好きで神田美土代町のY M C Aへ夜間の英語を勉強に通った。数学は幾何の補習を受けた。国・漢は比較的好きな科目だった。中学四年当時のメモを見ると、六月、築地の海軍経理学校視力不足で不合格、八月、軽井沢夏期錬成へ三八式歩兵銃携行し、炎天下一週間の猛訓練終了。

昭和十九年五年生に進むと北区の理研の工場へ学徒動員される。機関砲の部品組立職場で係から言われた通り仕上げを担当する。当時、東京空襲があり、日中グラマン戦闘機の機銃掃射に遭い、夜はB29爆撃機の焼夷弾投下による火災発生で火焰が夜空高く上がる。

十月には第二次動員令が発令されていよいよ勉学の道は閉ざされる。受験誌「学生」の紹介記事で満州国国立大学哈爾濱学院を知る。ロシア人の住む街、外務省や大東亜省の委託学生制度、何となく憧れる大陸という言葉の余韻に酔う自分を抑えられなくなる。受験